

## 平成18年度事業及び収支報告書

当振興会は事業開始から39年目、財団設立から34年目の年度を終了した。

### ・概要報告

音楽鑑賞教育振興会（音鑑）のこの1年間の活動は、当面の財団の目的に沿い、事業計画自体が教員への働きかけを徹底して試してみるためのものであった。その典型的なものは月刊誌の拡販のための予算を組んだことにあり、全体として、不要不急の経費を抑えて来た先期までとは異なり、財団の将来の経営資源を生む事業を育てる発想によるものであった。

その中には文部科学省のねらいに沿った電子情報ボードの教室導入に備え、新たな鑑賞指導の可能性を拓くオペレーションプログラムを自ら開発する試みも含まれた。

また、松本記念音楽迎賓館についても利用度で低迷する現況を打破するべく、公益法人として選択できる範囲のあらゆる利用促進策を取り込むための人事配置を行った。記念館事業でも待ちの姿勢から打って出る事業形態への移行に挑戦したものであった。

こうして財団が、とりわけ事務局としては過去取り組むことのなかった業務課題に対し、目標を明確にした事業運営を行ったが、概況とすれば一年間で成果を認めることの難しい現実を報告せねばならない結果であった。その詳細は各事業報告で説明する。

加えて財団を取り巻く環境に関して財団事業の影響力を広げることと、適正な収入源の確保のため、この期から事業パートナーの存在を探ってみた。実質的には雑誌に広告を掲載することと、貸し館とした松本記念音楽迎賓館でのビジネスを扱う事業者の獲得が主体であった。

こうした動きを通して得たことは、音鑑の説明に一定の理解は得られたが、音鑑が提供する情報に投資をしてもらうには、相当の時間と手間を掛け、また財団の影響力の実態を示すことがいかに重要かであった。この音鑑発信情報の影響力を一層高めることが今後の課題である。

新規経営努力がまだ実質効果に繋がらない期ではあったが、人件費をはじめ全事業に渡って経費をコントロールできたことと、地道な研究の成果として発行した書籍や、過去投資したDVD教材などの販売が伸び、平成18年度は対予算で約26百万円改善することができた。

### 1. 期中の重点施策についての報告

18年度設定の重点施策に従い報告する。

#### (1) 研究事業の成果を基にした活動

平成16年度から取り組んだ研究開発部会の研究は、音楽科義務教育9年分の指導計画を、学習指導要領の求めに従い財団として立ててみることによって、そこから得られる実践的なノウハウを初任の教員にも分かり易く公開する課題であった。その内容は音楽科としては基本的な事柄であり、途中の段階での成果発表をせず、その全貌が掴めてからとし、今期初めて書籍として販売することができた。この本の内容に対し講習の依頼が届くなど、影響力のある出版事業に繋がった。

その成果を財団の歴史からみると、音楽鑑賞の指導法に関わる専門財団が、「何のためにどのように鑑賞指導を行なうのか」を教育目的から引き出し、実践的理論を組立てることがで

きたものである。このことにより研究開発部会はその目的を完遂し解散した。

書籍については読み手に伝わりやすい形で表わすことも心がけ、従来の教育者向けの誌面の体裁を変えて提供している。

研究調査部会についても、選任されたメンバーの教育界への影響力の強さもあり、精度の高い数多くの実態調査データを得ている。これを分析報告するとともに、その内容を音鑑の研究及び助成事業の根拠として利用を開始した。

こうした動きをベースとして、音鑑の専門と言える鑑賞指導法の実践研究も、音楽の良さを教えるのみならず、あくまでも学校の教科に資する目的で、どのような“ねらい”の下、どのように子どもを導きそれを達成できるのか？といった生きた指導法にまで踏み込んだ活動をしている。平成19年度の計画は音鑑がこの研究を教育現場に提供できるように作成してある。

## (2) 月刊誌「ONKAN」の購読者増への取り組み

音鑑発行の月刊誌の購読者は、過去、海外研修ツアー参加特典や無償講習会を各地で開催し、直接販売ができていた時期でも、それらを中止し教員数が減少した現在の1.5倍程度であった。それを3倍にしようというのが平成18年度の課題であった。

その策は後述するが、結果としては予算に計上した販売促進費を使用したものの、購読者数は微増の有様であった。未購読者の読後感をアンケートの形で得ているが、雑誌の内容は有益としながらも、読み切る時間のない状況や、年間5000円でも躊躇の姿勢が見取れ、教員になった後の啓蒙活動の難しさが浮き彫りにもなった。

## (3) 教員の実践奨励の部、募集の充実

この重点施策は低迷している過去の応募状況を打破したく設けたものであるが、実現するには、応募基準を緩めるなどの措置が必要となった。しかし、募集目的がきちんとした年間指導計画に裏付けられた事例であり、他の教員からも納得の評価が得られる体験事例とする線は譲れないことが確認され、結果として数の増加の目的は果たせなかった。

## (4) インターネットのより積極的な活用

現在のホームページは財団の紹介を意図してデザインしてあるが、これを利用者により便利な情報の検索機能を充実させる課題であった。今年度はトップページの全面変更は費用面を考慮して避け、事務局が直接扱えるブログとホームページへの情報の挿入によって、利用者向けのサービスを始めている。情報提供を本格的に行なうには、独自のサーバーを立てる必要があり、これも視野に入れ次期の課題とした。

## (5) 松本記念音楽迎賓館の収益の増進策追求

平成18年度の経営結果により、この館の先行きを見定めるのが目標であった。

最も期待されたプライダル業者への貸与については、プロの業者自体が予想も付かない低迷の結果を得、この業者との優先予約契約を打ち切らざるを得ない状況に至った。改めて立地条件の難しさを痛感したが、丁寧な保守管理により、館の評価は年々増大し、専門業者や一般客の引き合いが確実に伸びている。先行きを決めるには確かな事業パートナーを得られるか否かに懸かってきたと判断する。

(6) 財団の資金を支える新たな事業の開拓

これまで蓄積された鑑賞指導法を、現在でも利用できる形に編集しなおして活用する方針でファイル化を進めている。またデジタル時代に備え、事務局のデジタル処理技能を高めるため、経験者一名を嘱託の形態で雇用し、この任にあたってもらった。その結果はこれまで至らなかった部分への取り組みを可能にし、次期に繋がる成果が期待できる。

(7) 「賛助会員制」の導入検討

会員制については新規に募集するのではなく、まずは月刊誌購読者へのサービスをもってその効果を図ってみることとし、平成18年10月から導入した。内容は冬の勉強会の参加料半額、音楽鑑賞教育振興会資料室の有料化に伴う利用料サービスなどとした。これは月刊誌の購読意欲を高める手だてでもあるが、実際に動き出したのは平成19年からであり、その効果はこれからの判断となる。

## 2. 予算対決算の概況

決算資料16ページ参照

この会計報告から事業運営基金の取崩し収入の項を立て、実質収入合計と支出合計額を合わせることとなった。これにより収支動向の実態を示していた当期収支差額(A) - (D)の値が決算額はゼロと示された。対予算比較のためには決算欄の(A) - (D)に事業運営基金取崩収入額¥65,936,637-を置くことにより、予算の¥91,650,000-の欠損は¥25,713,363-改善したことになる。これは実際の収入が対予算¥19,453,187-減少し、¥106,146,813-となったものの、費用を対予算¥45,166,550-押えて¥172,083,450にとどめた結果であった。

## . 個別事業の報告

### 1. 【研究事業】

(1) 研究事業委員会

研究内容全体の確認と連携を図る委員会として研究事業委員会を構成した。また、7月の「第30回夏のセミナー」、12月の「第4回新・冬の勉強会」の企画、構成を行なった。

#### 第30回「夏のセミナー」の企画

「子どもを引き付ける授業とは」、またその上で、確実に力を身に付けられる「ねらい」を絞った教材選択と指導法を普及すべく、内容を構成した。

このセミナーの特徴は指導助言者を交えた小集団研修で、実際に音楽を聴いて教材研究、指導の流れをシミュレーションして、合宿による徹底した実践的な体験研修をすることにある。現職教員の指導力向上を目指すものとして実施した。

研修の日程等は 助成事業の 項、主催講習会 の項に記載。

### 「新・冬の勉強会」の企画

音鑑の一年間の研究成果を提案する場及び音楽科教育の今日的課題を一括して学べる勉強会として、昨年度に引き続いて企画した。一度に全国の多くの教員に情報提供のできる場として、200～300人規模の受講生を集められる会場や内容を企画構成した。

その企画書をもって文部科学省の後援事業の認定を受けている。

研修の日程等は「助成事業の 項、主催講習会」の項に記載。

### (2) 研究開発部会

「義務教育9年間に音楽科が果たすべき指導内容とその効果の見取り方に関する研究」としてスタートした開発部会は、平成16年度に、学習指導要領を分析しその趣旨を読み取ることによって音楽科における学力としての学習内容(=「モジュール」)を明らかにし、学校教育の中での音楽科が果たす役割(「確かな学力」、「生きる力」にどのように関連づくか)を明確にした。この成果は、平成18年8月に書籍「音楽科では何を指導しているのか」として発行した。

平成17年度は、「モジュール」を活用した学年ごとの1年間の学習プラン(=「年間指導計画・評価計画」)の作成方法と、その具体例として9年間の「年間指導計画・評価計画」をまとめた。これについては、平成19年4月に書籍「音楽科の『学び』を浮き彫りにした指導と評価の計画とは」として発行した。

研究の最終年度となった平成18年度は、17年度にまとめた「年間指導計画・評価計画」から題材を選び、さらに具体的な「題材の指導計画」をその作成方法とともにまとめた。また、具体的な「題材の指導計画」の中で評価に関する考え方をまとめた。これについては、平成19年8月ごろに書籍として発行する予定にしている。

なお、平成18年12月に行われた「第4回新・冬の勉強会」では、「題材の指導計画」の作成方法と評価についての考え方を提案した。

### (3) 鑑賞指導部会

授業を実践する指導法に魅力がなければ児童・生徒に確実に力を身につけさせることができないという趣旨で、子どもたちにとって、客観的で「音楽を理解できる楽しさ」を発見できる指導法の実践研究に努めた。特に適切な教材選択、効果的な教材の提示方法、発問の工夫に研究のねらいを置いた。また、その指導法を音鑑から全国に伝播できる機会の核とするため、「第30回夏のセミナー」を改めて企画し実施した。

さらに「第4回新・冬の勉強会」では、研究報告として事例を使って指導のポイントを提案した。

### (4) 調査部会

平成17年度に実施した第1回調査をさらに掘り下げるため、第2回調査を行なった。調査内容は、「学校における鑑賞指導に関するアンケート」とし、教員の外に小学校、中学校の児童・生徒も対象にした。調査内容は下記の通り。

〔教員向け(小中学校の音楽に携わる教員)〕

- ・教材について
- ・指導計画に関わる内容について

- ・指導と評価について
- ・鑑賞指導における教材・教具について
- ・音楽鑑賞教育振興会について

〔小学校児童向け、中学校生徒向け〕

- ・授業と生活における音楽への意識調査

実施方法は、各教育委員会、全日本音楽教育研究会 各都道府県支部に依頼し、全国の462名の教員、15,570名の児童、6,203名の生徒から回答を得られた。  
なお、この調査結果は、「第2回調査報告書」としてまとめ、平成19年5月に出版した。

## (5) 資料室

音鑑が保有する音源や研究資料を、現職教員が教材研究や指導案検討の材料として利用できるように、平日10:00～17:30の間、予約制で利用希望者を受け入れている。

平成19年1月から、設備利用料として利用者一人あたり500円/4Hのご負担を願ひ、月刊誌購読者はそれを無料とすることで購読特典とした。

利用状況 月別利用者数および利用状況 ( )内は重複を含む回答数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
10	21	23	68	115	29	17	29	14	22	12	10	370
利用者勤務先 (285) %			利用形態 (294) %				利用目的 (389) %					
小学校			来室				授業で活用					
中学校			依頼				指導案作成					
高校							学校行事で活用					
大学							教科書・書籍					
他							論文研究					

利用者数は前年283名に対し、130.7%の計370名。

新規購入資料

DVD、CD、書籍など研究委員会が必要とするもの、および月刊「ONKAN」に掲載されたものを中心に購入した。

資料検索のためのデータ化

月刊誌を中心に、今後開発事業等での活用を考え、財団出版の指導事例などを検索できるようデータ化をすすめている。

## 2.【助成事業】

### (1) 選考委員の委嘱

改選となる平成18年度、助成事業実施にあたる選考委員は次の6名の方々に平成19年度までの任期2年間で委嘱、お引き受けいただいた。

小原 光一 財団常務理事 (選考委員長)

甲田 充彦 全国高等学校長協会 元会長、東京都教職員研修センター教授

西村 佐二 全国連合小学校長会 元会長、聖徳大学講師

大橋 久芳 全日本中学校長会 前会長、東京都台東区立忍岡中学校長

吉田 時雄 聖徳大学 元講師

渡邊 學而 音楽評論家、財団評議員

(職名は平成19年3月31日現在、敬称略)

## (2) 第39回 論文作文募集

例年本事業案内として全国の学校に発送しているDMを、DMに替えて月刊「ONKAN」6月号に論文作文募集要領を掲載し、募集告知と財団事業参加の呼びかけ、および月刊誌購読に繋がることを期待して配布した。併せてこの事業への取り組みのアドバイスや昨年の入選作を月刊誌に連続掲載することで、参加を呼びかけるとともに、購読に結びつけようとしたが、意に反して応募数半減、月刊誌購読横ばいであった。

募集テーマを「学校と音楽」に変更して以来、徐々に減ってきた応募数が、今回激減した理由として、募集要領を月刊誌で案内したことにより本来の作文募集案内と受けとられなかった可能性がある。また、審査対象数を減らす目的から校内で精選して下さるよう財団送付数を絞った結果、取り組もうとする教員の負担が大きくなったためと考える。

研究助成の部では東京都小学校音楽教育研究会にあって多くの教諭が属する「音楽授業を考える会」が入選したことにより、今後事業アピールの面で好影響が期待される。

なお平成18年度から、パイオニアサービスネットワーク株式会社にパイオニア賞最優秀賞副賞「電子情報ボード」の設置作業および費用を全て協賛していただくこととなった。

### 募集テーマ

- ・研究助成の部 「豊かな感性の育成をめざす音楽鑑賞教育の研究」
- ・実践奨励の部 「音楽鑑賞に関わる指導の実践」
- ・作文の部 「学校と音楽」

### 募集方法

全国の小・中・高校および、各市町村教育委員会 約42,000件に募集案内を送付。その他月刊「ONKAN」誌、ホームページ、および広告代理店を通じリビング誌・各新聞等に記事を掲載。

### 実施日程

募集期間：平成18年 6月 1日～ 9月30日

審査：平成18年10月 2日

第1回審査委員会

10月 2日～11月23日

各部門別審査委員会

11月30日

最終選考委員会

入選発表： 12月 6日

ホームページおよび郵送通知

表彰式：平成19年 1月28日

目黒・音楽鑑賞教育振興会

### 応募状況

	第39回	送付数	第38回	送付数	第37回	第36回
研究助成の部	3	3	6	6	4	1
実践奨励の部	6	6	4	4	11	(論文)5
小学生の部	2,074	510	4,094	952	5,059	5,851
中学生の部	5,457	411	7,886	986	5,863	6,534
高校生の部	723	87	1,087	119	1,636	1,321
作文合計	8,884	1,008	13,067	2,057	12,558	13,851
(応募校数)	293	-	470	-	488	721

入選数内訳（入選者名は月刊「ONKAN」2007.2月号に掲載済）

	入選数	研究助成金 / 実践奨励の部 副賞				
研究助成の部	1	研究助成金 100万円				
実践奨励の部	6	DVDレコーダー				
作文の部	最優秀賞	優秀賞	佳作	努力賞	入選計	パイオニア賞
小学生の部	1	2	6	4	13	10
中学生の部	1	2	6	4	13	12
高校生の部	1	2	3	4	10	9
作文の部 計	3	6	15	12	36	31
作文の部 副賞	MD/DVD コンポ			ヘッドホン		EPD, DVD-R 等

#### 審査基準

- ・研究助成の部：学校における音楽鑑賞教育、および音楽鑑賞教育にかかわる音楽科の実践研究計画を選考
- ・実践奨励の部：日頃の授業等において、音楽鑑賞教育の活性化に役立つことが期待される、具体的な計画に基づいた指導の実践事例を選考
- ・作文の部：学校での授業や音楽活動において、音楽を聴く楽しみや喜び、音楽とのふれ合いで得た感動などを、感じたまま素直に表しているものを選考

審査委員 計26名（対前年1名減：委員名は月刊「ONKAN」2007.2月号に掲載）

- ・研究助成の部：3名 ・実践奨励の部：5名
- ・作文の部：18名（小学生の部：7名・中学生の部：7名・高校生の部：4名）
- ・審査顧問 全日本音楽教育研究会 福井直敬会長

#### 協賛

- ・パイオニア株式会社 ・パイオニアサービスネットワーク株式会社

#### 後援

- ・文部科学省 ・全国都道府県教育長協議会 ・全日本音楽教育研究会
- ・全国連合小学校長会 ・全日本中学校長会 ・全国高等学校長協会

### (3) 海外音楽鑑賞教育視察団の派遣

音鑑の財源の都合で休止しているが、音楽鑑賞教育振興会の名で推薦するにふさわしい海外音楽ツアー情報を求めたが、大手業者から適合するツアーの紹介はなかった。

### (4) 賛助活動

例年通り広告や協賛は、全日本および東京都の小・中・高等学校音楽教育研究会名簿、日本音楽教育学会、日本学校音楽教育実践学会、各ブロックで開催される研究大会プログラムに掲載した。

研究団体への賛助は他に全日本音楽教育研究会、日本音楽療法学会などがあり、財団法人関信越音楽協会、財団法人日本オペラ振興会など演奏団体に対しても行なった。

(5) 鑑賞教室

主に「おんかん友の会」の会員、冬の勉強会参加者に、次のチケット斡旋を行なった。  
平成18年度斡旋コンサート  
藤原歌劇団 オペラ「トスカ」  
ウィーン弦楽四重奏団コンサート  
ベートーヴェン/交響曲第9番合唱つき(サントリーホール・東京芸術劇場の2公演)

論文作文入選者表彰式に合わせ開催された、ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ定期演奏会に、入選者および付添い者、審査委員、財団関係者など対象に希望者を招待した。

ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ演奏会

日時 平成19年1月28日(日) 午後2時

会場 サントリーホール

出演 指揮：豊田耕兒

演奏：ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ

曲目 ブラームス/交響曲第1番

シューベルト/未完成

ワーグナー/ニュルンベルクのマイスタージンガー 他

(6) 主催講習会

財団の顔となるイベントである主催講習会には多くの参加者を集める必要があることから、平成18年度は「夏のセミナー」において参加しやすい条件で聴講者を募集し、受講者を超える参加をいただいた。

4回目となる「新・冬の勉強会」は恒常化してきたがゆえに受講者確保が難しいと懸念されたが、有力な音楽事務所の協力により国立能楽堂での能楽鑑賞という特別な環境設定ができたこともあり、昨年以上の参加者を得ることができた。

また、「新・冬の勉強会」参加費を月刊誌購読者には半額特典にしたことで、若干数ではあるが新規購読者を得ることができた。参加者215名の78%は購読者である。

この特典による収入半減分、年度予算に対し支出が上回ったが、月刊誌購読と結びつけた展開を次年度に企画していくことができると思われる。

第30回「夏のセミナー」

研究事業委員会の企画を受け、下記の通り開催した。

今年度は、指導事例などの文字情報では中々表しにくい発問の仕方・タイミング、適切な教材の選び方、効果的な教材の提示方法を、実際にシミュレーションを伴って体得することができるように企画した。受講者数は、小学校教員11名、中学校教員7名の計18名で、小学校2グループ、中学校2グループで実施した。

なお、今回は初めての試みとして、セミナー最終日のグループ発表を公開とし、聴講希望者を募集したところ約50名の応募があった。実施内容は下記の通り。

研修テーマ「展開力ある鑑賞指導法を身に付ける」

ア 会場 パイオニア研修センター(二子玉川)



## イ 日程

第1日 7月29日(土)

13:00 オリエンテーション 開講式

13:30 講義「鑑賞指導の基本的な考え方」および「研修内容と進め方」の説明

15:00 グループ研修(課題把握と教材研究)・個人ワーク(指導の流れの作成)

18:30 懇親会

20:30 個人ワーク(指導の流れの作成)

第2日 7月30日(日) 終日グループ研修

08:30 個人ワーク(指導の流れの作成)

09:30 グループ研修(発問のシミュレーションと助言者によるコーチング)

第3日 7月31日(月) 研修成果の発表と閉講式

09:00 研修成果の発表(4グループ)

13:30 総評

14:00 グループ別、校種別研修のまとめ:受講生

特別講演:聴講希望者

15:30 閉講式

ウ 講師 小原 光一 (財)音楽鑑賞教育振興会 常務理事

渡邊 學而 (財)音楽鑑賞教育振興会 評議員、研究事業主管

エ 助言者 粟飯原喜男 埼玉県川越市立芳野小学校教諭

徳田 崇 創価大学講師

中島 寿 筑波大学附属小学校教諭

大塚 弥生 東京都港区立赤坂中学校教諭

山崎 正彦 武蔵野音楽大学講師 (平成19年3月現在)

オ 広報 月刊『音楽鑑賞教育』誌5、6月号

「論文作文募集」の全国各学校宛てダイレクトメール(6月初旬発送)

音鑑ホームページ

カ 参加費 受講生:30,000円(交通費は、20,000円を超えた分を財団が負担)

聴講生:2,000円

## 第4回「新・冬の勉強会」

音楽科教育の今日的課題を伝え、音鑑の研究内容の普及を図る集中講座として、財団の研究成果及び途中経過を公開し、参加者と共に学習指導要領に沿った音楽科教育、特に鑑賞領域の指導のあり方を考えることを中心に据えて実施した。

各参加者自身に関わる費用および印刷資料代を自己負担とし、財団は会場費及び講師・演奏謝礼を負担して実施した。

ア 主題 これからの音楽科教育を考える

イ 会場 国立オリンピック記念青少年総合センター(渋谷区代々木) 国立能楽堂

ウ 日程 平成18年12月26日(火)~27日(水)

第1日 12月26日(火)

13:00~13:15 オリエンテーション

- 13:15～14:45 講演「音楽科教育の改善充実の視点」  
 講師 文部科学省 教科調査官 大熊信彦
- 15:00～16:20 研究経過報告「『題材の指導計画』を組むにあたって」  
 報告 川池 聡 財団研究事業主管  
 伊藤 俊彦 日本女子大学講師  
 石井ゆきこ 東京都北区立尾久第六小学校教諭  
 宮下 秀邦 東京都青梅市立東中学校主幹
- 18:30～20:30 能楽ワークショップ 「能楽解説と鑑賞」  
 講師 小鼓方 大倉源次郎 ほか

第2日 12月27日(水)

- 9:00～11:00 能楽ワークショップ ・ 「狂言・鼓・能管」「合同演奏」  
 講師 小鼓方 大倉源次郎 ほか
- 11:15～12:30 講演「鑑賞指導の工夫改善」  
 講師 文部科学省 教科調査官 高須 一
- 13:30～14:40 研究報告「発問を大切にした指導の流れ」  
 講師 渡邊學而 音楽評論家、財団研究事業主管  
 小学校低学年、小学校中・高学年、中学校別分科会  
 粟飯原喜男 埼玉県川越市立芳野小学校教諭  
 徳田 崇 創価大学講師  
 中島 寿 筑波大学附属小学校教諭  
 大塚 弥生 東京都港区立赤坂中学校教諭  
 山崎 正彦 武蔵野音楽大学講師  
 (平成19年3月現在)
- 14:55～15:25 実践発表(論文・作文募集 実践奨励の部特別奨励賞)  
 「多様な観点から音楽を感受する力を育成する音楽鑑賞学習」  
 発表者 森保尚美 広島大学附属東雲小学校教諭
- 15:25～16:20 講演「ベートーヴェン：交響曲第9番『合唱付』の  
 第4楽章について」  
 講師 音楽評論家 渡邊學而

- エ 受講者 215名 (小学校110・中学校76・他29名/うち昨年参加者112名)
- オ 広報 月刊『音楽鑑賞教育』誌10、11、12月号、「論文作文募集」ダイレクトメール、音鑑ホームページ、各地音研大会研究収録協賛広告等
- カ 参加費 6,000円 資料代込み (音鑑誌購読者は半額)

#### (7) 助成研究発表会

平成19年1月25日に研究発表会を行なった。

・東京都渋谷区立幼稚園小学校教育研究会音楽研究部(平成16年度入選)

「音楽を豊かに感じ、表現や鑑賞することを楽しみ、かかわりの中で自らを高めようとする子どもの育成 ～『鑑賞の能力』をどのように育てたらよいか～」

参加者：約150名

### 3.【普及事業】

#### (1) 講習会後援

全国各地で開催される音楽教育研究会、各都道府県および市町村主催の講習会、研修会 21 件について講師の紹介、派遣の後援を行なった。

希望する講習内容にふさわしい講師の紹介とスケジュール調整や資料準備の窓口としての後援を行い、講師謝礼や旅費負担など、開催に伴う費用は主催者に求めて実施した。

講習内容は全て鑑賞の具体的指導法に関するもので、以前多かった「日本の音楽」「世界の音楽」といった教材の指定や、音楽科教育全体に関わる内容での依頼は無かった。

講習会後援数は 10 年前の 112 件をピークに年々減少しており、開催経費の主催者負担もあって後援経費は 8.3% に抑えられている。

平成 18 年度講習会開催件数内訳

各表( )内は 17 年度実績

	後援数	小学校	中学校	小・中	その他	参加人数
講習会	19(24)	8(16)	4(5)	7(3)	0(0)	1,257(1,130)
体験研修会	2(3)	0(0)	0(1)	2(2)	0(0)	55(70)
後援数計	21(27)	8(16)	5(6)	10(6)	0(0)	1,312(1,200)
参加人数計	1,312(1,200)	547	190	575	0	

平成 18 年度都道府県別開催件数 / 計 15 (17) 都道府県

3 件 神奈川(6)

2 件 東京(2) 千葉(2) 熊本(2)

1 件 栃木(1) 埼玉(0) 石川(1) 大阪(1) 和歌山(2) 兵庫(1) 富山(0) 福井(0)  
島根(1) 広島(2) 佐賀(1) 鹿児島(0)

平成 18 年度講習会講師 / 計 7 (11) 名・依頼件数順、敬称略

8 件 栗飯原喜男(6) 埼玉県川越市立芳野小学校教諭

4 件 徳田 崇(6) 創価大学講師

4 件 山崎 正彦(1) 武蔵野音楽大学講師

2 件 渡邊 學而(5) 音楽評論家、財団評議員

2 件 中島 寿(5) 筑波大学教育学部附属小学校教諭

2 件 福井 昭史(2) 長崎大学教育学部教授

1 件 高須 一(0) 文部科学省教科調査官

#### (2) 普及活動

音鑑が将来の事業展開のために、その考え方を伝えたい地域への普及活動として実施する普及活動は、「夏のセミナー」に準じた研修会として、2 件実施した。

・奈良県中学校音楽教育研究会

日 程 7 月 25 日(火) ~ 26 日(水)

講 師 渡邊學而

内 容 モーツァルト「レクイエム」の教材研究と発問を想定した指導の流れ

参加者 中学校教員 19 名

・北海道音楽教育連盟札幌市中学校支部

日 程 8月17日(木)9:15 ~ 18日(金)16:00

講 師 渡邊學而、中島 寿、山崎正彦

内 容 「協奏曲の名曲」に基づく教材研究と発問を想定した指導の流れ

参加者 中学校教員 18名

#### 4.【ソフト開発事業】

##### (1) ICT機器を活用した教材開発

平成19年度に新しい教材開発提案を行なうため、来期に向けた研究用機器として電子情報ボードを9台購入した。実際の指導から生まれる活用アイデアを吸収し、プログラム開発、指導法提案につなげていくために、和歌山、高知、熊本、東京のリーダー的教員に対し機器の貸し出しを行なっている。年度支出はこの機器購入費が大半である。

近畿音楽教育研究会和歌山大会では貸出機器を用いた研究授業を行い、多くの参加者にその効果を提示していただくことができた。

##### (2) WEBリンクによる教材開発

WEBリンクを利用した指導法自体を開発してきたが、今期は一旦電子情報ボード活用に集中するため、パソコンで再生するCD、DVDを電子情報ボード画面上で直接コントロールできる操作画面の開発を行なった。これにより教員の機器操作に伴う動きを効率化し、児童・生徒の視線をそらさない指導が可能となると思われる。

#### 5.【出版事業】

##### (1) 月刊誌『音楽鑑賞教育』の発行

事業性の組みなおし

月刊誌の制作費用を完全回収するために、購読者を増加し、50万/月の広告収入を見込むことを意図し、有料購読者三倍化の予算を計上した。これは過去購読者特典として掲げた海外音楽鑑賞教育視察団参加の企画があった時代にも到達していない挑戦的な目標であったが、それによって小手先ではない拡販企画を立て、今後に繋がる結果を得ることも課題とした。

具体的には、イ)新規購読者が目を引く掲載記事と内容を編集し、ロ)月刊誌の内容を広く知らしめ、ハ)払い込みなど購読の便を良くすることであった。

特筆すべきは、音鑑自体が非営利財団として営業を持たずに今日まで至っていることと、広範囲な告知が可能なメディアを駆使する力も備わっておらず、また内容の薄い講習会の依頼を淘汰してきていることで、現場の教員と接する機会が少なくなっていることである。従って、全国規模でお知らせするために、論文作文募集のダイレクトメールを使った。その結果はアンケートでフォローしたが、内容を読まれたのは配布の四分の一程度であり、同時に、上述の通り購入には繋がらない厳しい反応を得た。月刊誌の鑑賞指導における唯一の存在を継続するには、教員の求めに応じた部分の掲載を余儀なくされたといえよう。

## 購読者対応の内容について

### ア直接教員の目に触れるように配布

例年実施している全国の学校に送付している論文作文募集案内とあわせることで、認知および購読に結びつけようと、身近な現場環境をテーマにした特集を組んだ6月号を全国の小中高等学校に無料配布した。発送費は例年通り論文作文募集費で支出し、通常印刷より超過する42,000部を販売促進費で負担した。

この反応が実購入に繋がらない心配を得て、音鑑が直接フォロー可能な首都圏および研究大会を控えた地域の音楽担当教諭にあて、更に10月号をおよそ10,000部配布した。

### イ購読者特典の付加

内容とデザインだけでは購読に繋がりにくいことを捉え、年末から購読者特典を付加し内容に加え財団主催「冬の勉強会」参加費半額、資料室利用無料などを実施した。冬の勉強会ではおよそ20名が新規購読したが、50名近くの未購読参加者は参加費3000円割引にもかかわらず年間5000円の雑誌購読に繋がることは無かった。

### ウ広告収入

現在月12万の月刊誌広告収入を、毎月50万円得るためには発行部数を増やす必要があり、そのために6月号の全国配布にあわせた広告誘致を行なった。6月号単独では目標に近い収入を得られたがスポット広告であるため、固定収入にはならず目標額の27.7%、月17万の実績に終わった。

広告を出す側からは、まず発行部数に拠らず学校教育専門誌であり、一般企業が広告をだすのが難しいとの見解を受けた。企業側に教育財団を支援する目的が先にこないと実現しづらいとのことで、収入源としての見込みは外れている形となった。

### エ記事の構成について

- ・音楽専科のみならず全科の教員にも興味を持ちやすい有名な執筆者に依頼した。またこのことによって教員を志す学生の読者層を求めた。
- ・読みやすさを追求するためインタビュー形式を多く取り入れた。
- ・定期購読に加え単発の購読者を開拓するため、特集号を組み込んだ。
- ・誌面は編集行程を合理化するために、フレームを決めてパターン化した。
- ・編集担当者の退職により、外部雑誌編集経験者の提供するノウハウを十分に活用しつつ、事務局員がそれぞれの情報を伝えるために月刊誌を活用する体制とした。

### オ購読手続き

これまでは郵便振込みだけであったが、教員の勤務時間の制約を考慮し、支払時間の自由なコンビニエンスストアー決裁も開始した。

(2) 書籍発行

- ・平成18年8月 「音楽科では何を指導しているのか」(音鑑 研究開発部会編)
- ・平成19年1月 「研究報告第24号」東京都渋谷区立幼稚園小学校教育研究会音楽研究部

「音楽を豊かに感じ、表現や鑑賞することを楽しみ、  
かかわりの中で自らを高めようとする子どもの育成  
～『鑑賞の能力』をどのように育てたらよいか～」

(3) ホームページ

ユーザーの利便性を検討し、ネット販売システムの本格導入は見送ったが、代金の決裁方法にコンビニエンスストアでの決裁システムを導入することで改善を図った。

ユーザー数アップの為にブログによる誘導を図った。目に見えての増加は無かったが、タイムリーな情報提供の場となる記事を掲載した。

今年度のインターネット費からは、ページ作成及び更新に関わる支出のみである。ネットワークにかかわる通信費用は従来通り、管理費の通信運搬費とした。平成19年度からは資料データベースにかかわる費用をインターネット運営費に移管することとする。

## 6.【松本記念館】

平成18年度の音楽迎賓館についてはブライダルの専門業者と提携し、ハウスウェディングを軸とした部屋貸しを中心に増収を予算化した。しかし業者側が500万円以上の広告費を投入し営業努力をしたが利用が少なく、収入は大幅な減少となった。また経費面では常駐職員を強化した為、人件費が増加したが、施設の補修費を節約し前年並みの結果にとどめた。

一方で支援会社の利用は研修目的での認知度が上がり、大幅に増加した。また一般の利用についても、年毎に確実に認知度が上がっており、発表会等のホールの団体利用が増加した。電話での問合せ、見学希望も増加している。

しかし、このような利用が増えても経費も増えていくので、今後は賛助者の資金や安定的な会員などを募れる事業企画を検討せざるを得ない。

## 〔松本記念音楽迎賓館 管理実績〕

## H18年度音楽迎賓館利用料収入予算実績対比

単位 千円

	当期予算	当期実績	先期実績
利用料収入	10,400	6,662	3,397
ブライダル	6,000	1,402	0
家賃収入	500	0	0
スタジオ	900	0	0
一般利用料	3,000	5,260	3,397
コンサ - ト収入	420	589	1,482
ジャズコンサ - ト収入	420	484	454
その他コンサ - ト収入	0	105	1,028
合計	10,820	7,251	4,879

## 音楽迎賓館利用料内訳実績推移

単位 千円

	当期実績 18.4-19.3	先期実績 17.4-18.3
発表会、コンサ - ト	1,919	659
ブライダル	1,402	0
楽器個人練習	1,192	1,166
パイオニア関連利用	1,158	411
ジャズコンサ - ト	484	454
お茶会	251	346
パ - ティ -	178	124
その他	154	32
楽器団体練習	132	318
主催コンサ - ト	105	35
写真撮影&録音	101	58
プレスインタビュー -	93	7
カルチャ - 教室	82	65
ワ - クショップ	0	176
クラシック	0	644
オペラ落語	0	384

## 音楽迎賓館運営経費実績

単位千円

	当期	先期
庭園管理費	2,210	2,265
固定資産税	7,587	7,511
機械警備料	499	499
自動車費	374	301
人件費	9,929	7,150
その他	4,246	5,034
基本運営費 計	24,845	22,760
施設補修費	1,301	3,231
調律費	321	281
出演料	357	779
備品等購入費	64	266
その他	1,083	475
事業運営費 計	1,825	1,801
合計	27,971	27,792